

お茶の歴史と文化

村岡 実

原産地は中国

茶の原産地は中国雲南省辺りとされ、ここから日本など世界各地に広まりました。茶の利用の始まりにはこの地域の少数民族による料理説や「煎じ薬」説があります。



東亜半月弧地図

紀元前1世紀頃には、四川省辺りに伝搬し、茶葉を飲料とする喫茶が始まり、唐の時代(705～907年)には中国各地に広まりました。この頃に今でも名著とされる陸羽の「茶経」、盧仝の「茶歌」が書かれました。

日本にいつ来たの

日本には平安時代の初め頃、最澄などの遣唐使が帰国の時に茶種を持ち帰ったと言われています。この頃は嵯峨天皇をはじめ、ごく一部の貴族や僧侶が茶を嗜んでいました。

中国では唐や宋の時代までは摘んだ茶葉を蒸し、乾かして保存していました。それを薬研で細かくして、お湯に溶かして飲んでいました。



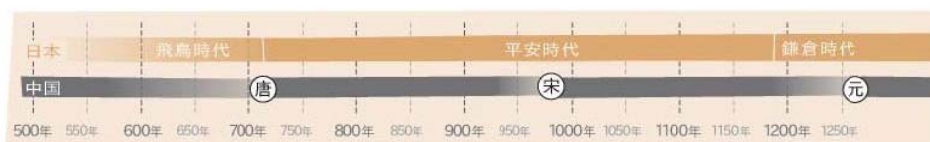
薬研

13世紀初めに栄西(臨済宗開祖)は「喫茶養生記」で、茶葉を粉末にして服用すると健康増進、長寿になると記しています。



栄西

中国では明の時代(1368～1644)に、茶葉を釜で炒って揉むといった、私たちが現在、用いている煎茶が考案されました。



武士の茶文化

日本では茶の粉末を茶筌で泡立たせるなどの喫茶法が発展し、15世紀には千利休が抹茶法(茶の湯)として体系化しました。



千利休



抹茶法



煎茶法



賣茶翁(若冲画)

その後、宇治の永谷宗円が蒸して揉んで焙炉で作る煎茶法を考案しました。これは急須などを用いますが、佐賀蓮池藩の高遊外(賣茶翁)も、この茶を堪能し、京都の地で多くの人々に喫茶を広めました。

江戸の茶文化

江戸時代(1603～1868)中頃になると、多くの人が茶を飲むようになり、各地に茶の産地ができました。嬉野も茶産地として有名になりました。



大浦慶

幕末から世界へ

幕末には長崎の大浦慶が嬉野をはじめ九州北部の茶約6トンをイギリス人オールドに売買し、この茶が欧米に渡りました。

明治になると日本各地の茶は生糸と共に海外に輸出され、紅茶も作られるようになりました。



この頃から、茶を生産する茶業農家、茶を消費者に届ける流通・販売業が起こり、今日に至っています。また、茶はコーヒーと共に世界各地で、人々の暮らしに定着した食文化、飲用文化となっています。

